

第三章

怒りがゆく



マジメがしばしば嘲笑される当節ではあっても、マジメ以外の何ものも要求されない場合もある。この章には概してそういう場合と心象とが集っている。

冒頭の「すわりこむと」では、編集委員会で論議が生じた。つまり「ごみの低さにちかずく」という一行を、どう読むかの問題であった。論はわかれたが、この短章の湛えたずしんとしたものは皆異議なく認めていた。

すわりこむと

■松浦 英政

すわりこむと

ごみがよく見える

すわりこむことは

ごみの低さに

ちかづくことだ

たたかいの歌

■ 東野 伝吉

1

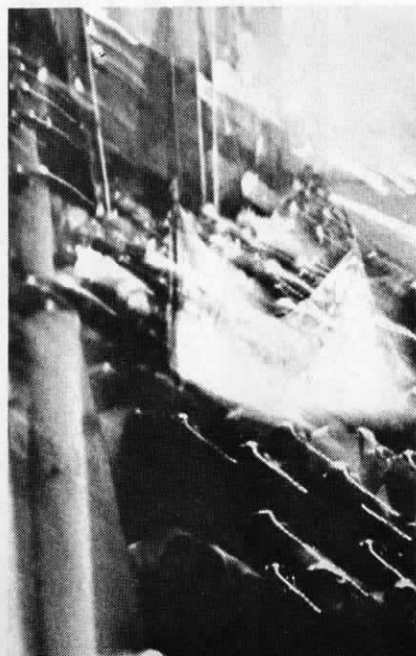
おれがゆく
きみがゆく
おれときみがゆく
怒りがゆく

あのひとがゆく
あのかたがゆく
あのひととあのかたがゆく
おれときみとあの一とあのかたがゆく
憎しみがゆく



2

おかみさんがゆく
むすめさんがゆく
おかみさんとむすめさんがゆく
主人がゆく
店員がゆく
主人と店員がゆく
おれときみとあの一とあのかたと
おかみさんとむすめさんと主人と店員がゆく
胸のかたまりがゆく



たたけ
こなごなにたたけ
敷石をたたけ
ぶつつけろ
ぶちあたれ
ぶつつけろ
ぶちあたれ

しずかにするな
いいこになるな
わめけ

にんげんだにんげんだ
わかものだわかものだ
首をしめられて倒れているのは
頭をつかれて倒れているのは
にんげんだにんげんだ

にこつた眼球のなかにある
おれのからだのなかにある
おれのなかにある
それだけがある
樺美智子さん

涙のくだをきりりとしめろ
眼は矢をもて
眼はささえろ
おれたちを

3

一九六〇年六月十八日
おれたちのからだをしめつける
強い絹糸をぶつつりかみきる日
たたかうことよって存在する日
おれがおれである日
虐殺抗議全学連総決起大会の日

大阪大学のわかものだ
立正大学のわかものだ
東北大学のわかものだ
千葉大学のわかものだ
新潟大学のわかものだ
東京大学のわかものだ
喪章のあつまり
法政大学の自治会旗
早稲田大学の自治会旗
明治大学の自治会旗
教育大学の自治会旗
社福大学の自治会旗
学芸大学の自治会旗
よれよれのズボンの足なみ
信州大学の代表団だ
香川大学の代表団だ
島根大学の代表団だ
立命館大学の代表団だ
奈良女子大学の代表団だ

よこれたスカートのあつまり

北海道大学のアカハタ
学習院大学のアカハタ
宇都宮大学のアカハタ
京都大学のアカハタ
美術大学のアカハタ
ぼろ靴の足なみ

一九六〇年六月十八日
虐殺抗議の

おれたちの
からだの
日
だ

4

娘ハ殺サレタノデス ソノ悲シミハ深クタエガ
タイモノデス ケレドモ ハッキリト娘ハ殺サ

レタノデス 娘ガ希望シ 求メテイタモノハナ
ンデアッタノデシヨウ ソレハ学生ノミナサン
一人一人ガ知ッテイルコトデス アナタガタノ
タタカイガ ヤガテナシトゲラレルコトヲ 娘
ハ静カニ見守ッテイルコトデシヨウ 英知ト情
熱ヲモッテタタカイヌクコトガ ソシテ ワタ
シモイッショニ今タタカウコトガ 娘ノユク道
デアッタコトヲ深ク感ジルノデス

だれができようか
悲しみを怒りにかえることを
だれにできようか
怒りを未来の灯にかえることを
だれが

だれがいつまでもだまりつづけるというのか
だれがいつまでも首をさげたままであるのか
のりこえろ

今こそ
樺美智子さんを

ワタシタチ母親ハ モウシワケナイトサエ思ッ
テオリマス ミナサンガ安心シテ勉強デキナイ
デ デモニ参加シナケレバナライヨウナ ソ
ンナ政治ヲスル人タチヲ許シテキタノハ 大人
タチノ責任ダト思ウノデス ワタシタチ母親ハ
息子ヤ娘タチノスルコトヲ ケゲンナ目デミテ
キタコトヲ恥ジルノデス 自分ノ子ドモハカワ
イイ デモニナンカユカセタクナイ ケレドモ
今ハモウ イッテオイデ アトカラオカアサン
モユクカラ トイウツナガリデミルトキニキテ
イルノデス 母親タチハ 今こそ 愛スル娘ヤ
息子タチノデモノ最前列ニ立トウジャナイカト
考エテイルノデス

5

進め進め

さびついた時計を

そつと内ポケットにしまっているのはだれだ

団結かたく
わがゆくてを守れ
わがゆくてを守れ

ぶちあたれ
ぶちあたれ
道をあけろ

欲求をとぎすな
大きく道をあけろ

おれときみと

あのかたとあのひとと

おかみさんとむすめさんと

主人と店員と

みんなとみんなと

おれたちはゆく

おれたちの

あたらしい

ひろがりのなかへ

「横浜文学」一九六〇年六月号

民主主義の町を出よう

■長田 大生

民主主義の町を出よう

錆びたひかりの降りかがやく

白い舌の演説がつづく

拳手と拍手にどこまでもおし流される

藻にからまれる、満艦飾の町を出て行こう

おれとおまえが、ひとつ影を重ねて

けぶる橋のように

蒸発してしまつた

精神と

塩を、とりかえしに

むしあつい町を出よう

くすりだらけの

胃袋の町を出よう

神の目を突く

棘と

アンテナと

くさる指の

民主主義の町を出よう

ベルがなりわたる町を

とろける脂肪の町を

暈をかぶった太陽の町を出て行こう

蛾のにおい

急にやってくる発汗

甕の底の情熱のにかわ

そして叫ぶ丘、が見える

民主主義の帽子の町を出よう

星のしわむ

折れる弓の

鼻のつまった町を

パイプとポンプで

ねじまがる町を出て行こう

塩も、祈りもない空部屋で

こどもはお菓子をたへながら

青い砂絵と、いびきをかいている

同じ、かびの明るさの部屋で

おまえの飢餓感覚と

飢餓感覚のおとこが、裸で

杭のようにまじわり、もえている

まったく同じ、部屋の窓に

転倒している

花束の庭

掃かれていない空

すきまだらけの木と木の町

いぶし銀のくもの巣の照る町を出て行こう

民主主義のほこりの町を出よう

どぶねずみと、土地所有者どもの町

約束のない

広場のない

契約ぎれの

糸のきれてしまった町から

一月の風に吹かれて、出かけよう

うすぎたない、欲望の

支配する、退屈の

這いまわる、性欲の

隠される、暴力の

叫びあがる、恐怖の

おびえる町を、あとにしよう

どこかで、悲鳴が消され

だれかが、信条を売りあるく

にごる会話よ

よどむ時間よ

ちっぼけな渦となる、運動よ

失われる、地平の塩よ

目かくしの、自由

壁のなかの、明日

造化の、知性

風の、創造よ

民主主義の、紙とふぶきの町を出よう
空の洞む町を

膿んでいる、たそがれどきの
羊どもが行進してくる、町を出よう

おれとおまえの、ひとつの壺のなかに
さわぐ湖水がある

また、さらにさわがしい未来の鳥たち
おまえの、羽ばたきは

虹をかけ

柵をこえる

その、翔天こそ

花を食うものとの戦い

羊歯を敷きつめるものとの格闘

もつれあう、樹々のこずえに

やがて、生誕する卵から

生きている夢、が昇天する

民主主義の、なみだの町を

泥濘の町を

手袋が、しきりと招く犯罪の町を

黄いろい旗の立つ、地底の町を出よう

繁栄の焚火に

照らされた

墓場の、町を

ふりむくな

口を
引き裂いて
やりたい

——某大使の出兵論によせて——

■武田 豊

両方の人指しゆびを相手の口の中へ入れ

「この口がぬかしおったか 引裂いてこます」

と 力んでいた男があつた

こんな喧嘩を 母が小さい頃見た

思い出してもぞつとすると

僕の幼ない時に話したことがある

歳月が流れ

そんなことは別世界のように忘れていたが

今 僕にも

口を引き裂いてやりたいほどの奴がある

そいつは米国へ いや 本国へ?

ぬかすだけぬかしてさっさと引き上げて行った

鉢の草花を陽あたりへ廻しながら

想う 引き裂いてやりたいほどに

(個人詩集より)

過去を現在から解放せよ

■田村 正敏

かこんでいるのは僕等ではないか
圧倒しているのは
まぎれもない僕等ではないか

凝縮した時間
紅く拡がる時間
それは自らへの告発から始まったはずだ
僕等は現状という幻想の中に
頭をつっこんでいる訳にはいかない

蒼ざめた番犬達
奴等は

何が問題なのかを主人は誰なのかを

知っているのだ

だから僕らは 大地を蹴って
さけぶのだ

同志諸君！

アジを始めろ 武器を 笛を鳴らせ

そして

僕等は歴史を身ごもる

〔一九六九年七月〕

—— 筆者は日大全共闘運動に参加 ——

11・30 糟谷君人民葬

権力はもちろん「芸術」権力や「文学」権力からごく身近な「善意」権力に至るまで）
日常性の中での隠微な死をも含め、死を迫るのだ。
だが〈私〉は生きる
〈私〉たちが生きることによってしか〈かれ〉を葬い得ないのだろうか
丁度〈私たち〉が未だに〈有本さん〉（有本機動隊員ではない）を葬い得ていないのと同じように、
〈五項目要求〉のいう〈人間開示〉の道は険しい
〈私〉たちは二人の人間の〈死〉を
そしてその背後にある現代社会の無数の人間の〈死〉を
〈生〉きることができのだろうか
〈私〉たちは一一・三〇をその課題追求の第一歩とし、あらゆる権力に対する〈人間〉の総反撃の始まりとしなければならない。

〈喪章者〉

を《生》の出発点とせよ！

〈喪章者〉にことばがない
「大学の死」を告げる〈喪章者〉に
〈糟谷君〉を送ることばがない
いや、ことばがないだけじゃない
いま、〈私〉が〈かれ〉を葬うことなんかできやしないのだ
人民葬——どこかちがう
「人民葬」——「プロレタリア戦士として」——「階級斗争のさなかに」……
このような一連のことばのもつ澱^{せき}を越えたところに
〈かれ〉の〈死〉があるのだ
〈かれ〉は自らの内の〈人間〉を開示しようとする過程で死んだのだ。
いや、殺されたのだ
自らの内の〈大衆〉を開示しようとする者に対して権力は
（国家権力だけではない、国家権力を支えるところの縦横に結びつき補完しあう支配構造すべて、マスコミ

11・30 毎1時 法文 20番教室

けいさつかんのじんけん

■あいかわみちこ

はかたえきしけんを こくはつした
いのうえ まさはるし のかたを

きやすく たたいて

ふくおかけんけいほんぶちようわいった
がくせいのはんけん わ いのうえくんが
まもり いのうえくんのじんけんわ けい
さつがまもる しかし いのうえくん

けいさつかんのじんけんわ

だれがまもるのかね

いいわすれたが

さとう えいさくくん が いった
じつわ けいさつかんにわ じんけん わ
ないのだ

これは おぼえておいて いいことだ
そうでなければ あさま さんそうで
きみたちがしぬわけわないでわなにか
じつわ あのとき コメント わ
ふたつ よういしてあったのだ

きみたちがしぬとき と

むた やすこさんが しんだとき だ

ごうかんされている かのうせい わ
わたしのほんのう からも じゅうぶん

かんがえられた ので

よごれたおんな わ ころしてもいい

ことばをかえて いえは

とうかかんも ひとしちのくつうに たえ

られないだろうから

ふみこんで しゃさつ してもいい

もちろん きみたちが しゃさつ される

ことわ よてい されていたのだ

そのしょうこ に すぐ コメントを

だした てわなにか

これわ おぼえておいていい ことだ

そうでなければ しづや で

さんりづかで

きみたちが しぬわけわ ないでわなにか
さんねんまえに いいわすれたが

きみたちを がいとうちんあつ に だす

とき

きみたちが ひとをころしても きずつけ

ても

きみたちを きそ しないと やくそく

した

きみたちも いきもの であるから

いきっていく かね わ あたえた

なんども いうようだが

しかし じんけん わ ないのだ

き が つかなかった かね

きみたちが しゅつどうふくをきて

じゅらるみんなのたて を にぎったとき

いきもの の ち かく まて うしなつたのを

きみたちわにんげんのりょうしんであるいきもの の ち かく まて うしなつたのを

いいわすれた

わたしが わるかったが

きみたちに だんけつ されて

がいとちんあつ を きよひ される

のが こわかったのだ

しかし すぎさったことわ

みず に ながしてくれたまえ
いまや わたしのために

きみたちの

のこつた いきもの の いのち まて

ひつようなのだ

きみたちが しんでくれる

ことによつて

よろん が どうじようする

その どうじよう を くつて

わたし わ いきているのだから

ワハハ……

(72・5・5 よこた)

治外法権

■長船 青治

ある日

彼らは 文教委にジカダンパンに行った

我々は 四大学全共斗連帯集会に参加した

お解りかな?

司法の端女権力の詰所を訪れて俺の女にオメコをさせろノ許された俺のオメコを何故させぬとジキソに行つたのは 大衆で

運動場・キャンパスで コップ酒をかわし

まだあるぞと 学長室の酒蔵から 何ダースか忘れた

が ビール・コーラ・ウイスキーを 夜な夜な持ち出して 午前中は酔いつぶれていたのも 大衆だったが 後の大衆は いつも 何かを 壊していたぜ
しらぶでね

滑稽なことは 前の大衆は 後の大衆が盗んで飲み干した酒代何万円だかをカンパして 学長に弁済したことである

これには 後の大衆も 一人は腹を抱えて笑い 一人は苦い顔をして笑い 一人はしばらくして怒ったが

さて

法外な要求をする者が大衆の中に現われた時それは法外なことだと諸君は思うかね？

司法組織に 諸君が 法外な要求をされた時司法組織は法外な組織だと思ったら万々歳！！

諸君は あくまで孤りで

時々 団結して

前でも後でも 好きなようにやってくれ

負けるな瘦せガエル

俺もお前も同期のサクラ

まま いっこんなかたむけて

まづわ ゲロゲロ

一緒に胸かきむしり

ヒイヒイ言って 泣きましよう

俺もお前もカンケイないが

あっはっはっ

高過ぎるビルに見飽きたと

火を放って見るも

まま つまらんことではあるけど

まずわ ニヤニヤ 笑って見給え
いっしっしっ

え？

そりゃあお金のある人は

ビルや電車を弁償して上げるのは

もちろん 充分 良心的で

ウッヒッヒッ

けっこおけだらけねこはいだらけ

おさるのおけつはまっくろけ

でも あなた

底なしの金持ち は 司法組織です

そうでしょう 司法組織さん

もつと高いビルを建てなさいよ

速い電車を走らせなさいよ

もつと暴力学生を弁護してごらんなさいよ

気違いを死刑にしてごらんなさいよ

あたしゃ せいぜい 治外法権

まよなかのブルースを 孤りで歌えれば

それでいいのだ

何処でもいいから 灯油を探せ

ドジらないように ネット
下手っぴい

まずわ 綺麗な 三毛猫でも 殺して見給え

三味線の 音のひとつも 覚えてみろ

では ごきげんよう

おたっしやで

「しかし、火と雖も治外法権ではない。」
成程ねえ
確かに 火は消えてらあ
あっはっはっ
笑わせるな！！
司法官クン
表へ出ろ！

一九七一年十一月・七夜作

栄作の目を見ないようにしましよ
同志などと甘い言葉の夢を見ないようにしましよ

たとえば

満員電車が頭に来たら

まま その時はがまんして

後日 グリーン車が空っぽで走ってる

その時やればいい

高過ぎるビルに見飽きたら

直ぐに その時 直ぐに

そのビルの 地下室だろうが屋上だろうが

ワタシが悪い、
ムスメが片輪の子を産んだ、

ワタシがムスメに食べさせた、
米 牛乳 野菜 果物 肉 魚、
毒がムスメを通してマゴに移った。
マゴは、視力の衰えた眼で、
ワタシをにらむ。

オマエが悪いのだ、
悪いと判っていないがなぜ食べた。
いやだとなぜさげばなかった、
あの時いつも心配しながら、

一しょうけんめい米をといだり、
りんごの皮を厚くむいたりしたが、
なぜ大きな声で叫ばなかったか、
安心して子供に食べさせる物をくれと、
なぜ立ち上らなかったのか、

のどが痛いのも体質のせいにして、
何も云わなかったワタシのせいだ、
今更、何と弁解しようと、

かわい、マゴには聴く耳が無い。

■多田 たか子

こ

え

戦士のうた

■ 白川 透

I

戦士たちよ ぼくもまた
排泄物はいせぶつのにおいのまわりつく
家と故郷ふるさとの山河を棄て

それらの全てを掃討するために
かつて村の外に幻想を託して旅立ちをした
ひとりの夢の狩人であつた

おそらくは戦士たちよ
君たちは信じないかも知れないが
いま君たちの侮蔑みづみのまなざしをうけ
暮れなずむ窓辺で君らを見送るぼくこそは

そのために死ぬるぼくの美の帝国には
純潔で透明な一人の幻想の少女がいた
ぼくはいまわしい追憶を鋼鉄の檻におしこめて
十余年前にこの村を出ていったのだ

おゝこのいまわしい村の中で
ぼくはやせて小さかつた
終日汚物にまみれて
日陰をはいまわつて生きていた
ぼくの青白い肌は長わづらいの病者のごとく
垢の苔におゝわれてつねにおびえていた

それらすべてのぼくの陰画は
ぼくの生活の全ての面につらなっている――

このいまわしい村の人々
ひの木に囲まれた杜の破れや
廃棄された土蔵の暗がり
古ぼけた木造の小学校の校舎に
あるいはかしがつた生家の屋根底に

風化したかつての夢の軀みづみを抱いて
昨日幻の戦場から生きて戻つた者なのだ

かつてのぼくの決断は一つの断念から生れた
故郷ふるさととの訣別はぼくの自己嫌悪の結果だつた

まずしくいやしくみにくかつたぼくは
少年の日に美しくなることを断念した
美しくなれぬぼくは美しく死ぬことのみを願つた
美しく死ぬためなら必敗の闘いをも辞すまいという
ぼくの決断は ぼくの肉体の外でなされた

ぼくの肉体の外、ぼくの体臭の外、ぼくの村の外に
ぼくは一つの帝国を構想した

古ぼけて大音をたてる柱時計に
そしておふくろの顔のしわに
消しがたくしみついてぼくを脅かしていた

それらをぼくは鋼鉄の檻になげこんで
夢の狩人となつて幻の戦場を駆けまわつてきたのだ
だが戦士たちよ 村を出ることぞ
脱出したとぼくが信じた村の呪縛は
ついにぼくを自由にはしなかつた
ぼくがすてなかつたぼくの肉体は
幻想の美を自由に語るぼくの偽瞞を告発し
故郷ふるさとの美について語るぼくの言葉は
いつもしろめたさにつきまとわれていた

II

村の外には空虚があつた
充たされると信じていたぼくの夢は
そこで自由に拡がつた

それとともに無限に拡大する無意味な概念は
だがぼくを不断に非在化へと追い込んだ
そこには村に君臨している敵が送った
ぼくらの殺戮を公務とする犬殺し人がいた
生活忌避者をぶちのめす銃床は
村の掟の外におかれていた

犬殺しの殺戮は村人に支持されていた
何といつても犬殺しは公務であつたし

ぼくは掟の敵として孤立していた
だからぼくの孤立は死と重なりあつていた
幻の戦場には 死だけが現実存在していた

何人かの戦友は倒された

彼らは各自のコンプレックスを宿す肉体から
はなされた

逃亡しないまゝでぼくは生き残つた

深手の傷が心臓の横にあつたが

故郷の血の流れる肉体はぼくに密着していた

膨張したぼくの無意味な概念は
ぼくの傷をいやすものとはならなかった
あてどなく空虚を彷徨している時
ぼくは ぼくの肉体の声を聞いた

——お前はどこからきたか お前について語れ
お前が何であつたかを お前の恥部に依拠して語れ
お前が抱いた屈辱の檻を

お前の敵に返品するために

お前はいますぐ村に帰れ!!

お前の肉体の傷は 故郷でしか治癒しない——

ぼくは村に帰ってきた

搾りつくされて乾からびて死んだ

ぼくの父祖たちの怨念のこもる村へ帰ってきた

間引かれたぼくの弟妹たちのねむる村

そしてぼくの肉体のしみまでも生みだしたこの村に

ぼくは村人となるために昨日帰ってきた

だがぼくは 村人一般になろうとは思わない
ぼくが幻の戦場からもち帰つたもののうち

風化した夢と 空虚な概念と

戦友たちの悲歌と 犬殺しへの憎悪を

戦場で開かなかつた鋼鉄の檻の中味とともに
今こそ敵に返品するためにぼくは帰ってきた
だから村人たちよ ぼくは君らの同朋でない

ぼくは君らの屈辱を呼び覚ます者だ

忍従の壁を穿つて村の蜂起する刃をさがす者だ

おゝ 遠のく戦士たちよ

隊列の最後につらなる小柄な戦士よ

ぼくの言葉は君の耳にとどかないか

あるいは引かれ者の小唄としか響かないか

君は鋼鉄の檻をもっていないか

その中味をさらけだして 村の中心へ

ぼくらからかすめとつたものでモーターを買い入れ

自分こそ村の原動力だと

うそぶいている奴等のところへ

いまからでもむかおうとは思わないか

ぼくはいま語るべきものを一杯もっているが

それを語るべき言葉を知らない

村の外を垣間見たぼくの倒れた戦友たちよ

村の外に道はなく

肉体を包みはぐむ自然はないということ

そして生活忌避者を屠る犬殺しがいて

村の外には敵はないということ

あゝそして何よりも

村の外に戦場などありはしないということ

かつてのぼくのように去つてゆく戦士たちに

ぼくは一体どんな言葉で語りかけたいか

闇のとほりが隊列をのみこんでゆく

そして、ぼくは いまも言葉なく待っている

(一九七〇・五・二〇)

ある抗議集会にて

■橋本 幸宏

主催者の労組幹部は
動員力を誇って議長席にそり返り、
間近い選挙の票田に涎垂らして
来賓の議員は威勢のよい演舌をぶちまくる。
動員をかけられた組合員は
演壇に背中を向け
時間潰しの雑談にふけりきっている。
あらゆる不協和音が奏でられる中、
その集会は
淡々と行なわれていた。

筋書きどおりのアピールは
気怠い拍手で採択され、

そしてシュプレヒコール。
欠伸の混じったどよめきは、
拘束を解かれる参加者の
素朴な解放の歓喜の声。

これはいったい集会じゃないか。
怒りを持たない組織が
痛みを感じない人間どもを
山盛り集めて
それで抗議集会だって。
中途半端に突き上げられた拳は
いったい誰に向けられているのか。
握りしめた拳の中には
いったい何があるのか。

五月の夜空は
重い雨雲に覆われて
月は隠れてしまっていた。

弁証法

■星 国夫

殺されることが革命である
殺すことが国家である

死の経験をもつのは人間の権利である
権利のために戦争を起こすのが権力である

権力を欲望するのがイデオロギイである
平和を欲望するのは官僚主義である

自由は家庭を破壊する
政府は一世帯一住宅を宣伝する

家庭とは家と庭のことだ

国家とは政治家の家庭のことだ

殺されるのが革命
殺すことが政治

殺されつづける正義
殺しつづける不道德

その秩序！

優しいうた・ノオトより

■ 條 冬樹

日常性を絶ち切ったのはじめて闘争が展開される、
のではない。日常性をまるごとかかえこんだまま、そ
れが闘争なのだ。あるいは日常性をふっ切るとまも
なく既に、ぼくには闘争があった、と言うべきだろう

か。権力に無理強いに奪われている、その恥ずかしめ
を恥ずかしめとせず目をつぶり、うなだれつつ辛うじ
て昨日から今日にくらしが続いているとはいえ、しか
し、あからさまに暴力執行者という権力の素顔の前に

自分の全姿をさらす抗争の場に踏み入るには、無限に
自分を埋積しようとする怯懦を刻々排除しなければな
らない

流布された恐慌にかられわれ先に都心から脱出する
サラリーマンの流れに逆らい、戒厳令まがいのその場
に向け、いくつかの交通機関を乗り継ぎ地下鉄から地
上に出れば、すぐそこが、検問と阻止線で都市生活の
日常性から強圧的に遮断された、それゆえにぼくらの
回性をめざす抗争の場だったのだ。だが、そこに自分
の歩を進めるに先立って、はるか手前から、まず自分
自身への闘いがあった。途中、任意の駅で電車を下り
引返すか、乗りすごして「善良な市民」の群に身を任
せてしまうか、あるいは喫茶店にもぐりこみ、ほんの
数時間テレビでも眺めているか――

組織の動員をうけたわけではない。何者かへの誓約
を果たすためあるいは集団の鉄の規律に服して参加す
るのでもない。あくまで自らを待み、自らのみ責め
を負いその道行きを歩むとすれば、様々な物理的障
碍がぼくを阻むにせよ、右せんか左せんか最終的にはぼ

く自身のところが無限の選択肢の中から唯ひとつ、そ
の途につかしめる。一步一步、更なる恐怖にうちかつ
て、威丈高な権力武装集団の封鎖の中にぼくの生涯を
はこびこむ、素手のぼくに、自由のほか何があるう。
それを「優しさ」とぼくは確認する。

あるときは、黙々と集まりひとりひとり自らのかけ
がえない「自由」の表白をゼッケンの背に綴って、その
まま縞馬がする防禦の円陣のように路上に座りこむ。

《人＝優しさ＝》

そのような文字をぼくは、ひとりの未知の少女の背
に見出し、親しみをこめて目礼し、ぼくもコンクリー
ト舗装面の冷えきった硬さの上に、ぼくの尻をすえる。
自らの内に烈しくせめぎあう何ものかに耐えるぼくの
眼の位置からは、驚くばかり背丈巨きな群衆。広場を
かこむビル群より高い視角からぼくたちに注がれる好
奇の瞥見。そして極めて徐々に、しかし確実にひびき
あい、その空間を熱く澄ませるもの。そのいとまもな
く殺到する官憲の、憎悪の怒号。



眼

■加藤 昌一

あのデモ隊員の眼も
このデモ隊の隊員のも
孤独の影を宿していた
警官たちの眼は

...

もつと孤独感にあふれ
そして孤独と孤独の大きな
流れになって行った

一九六四・一・二〇

文連常任委員会アピール

■土方 知巳

1

俺達はフエニックスではない
死ぬために泉をさがす鳥だ
木々を揺する風は止み
小川はすでに夕方になったことを告げる
夜は影を増し
その影の中に草が伸びるのが聴こえる
俺達はフエニックスではない

2

夜が更けて
微風と共に朝を用意する鳥だ
俺達は深く眠るほどに
破壊された城郭の上で死ぬ夢を見るのだ
涙で重たい君達よ
この墓石の凹んだ文字を
手で読み取っておくれ

3

君達がその意味を拒否したとき
石工の素朴さが報いられるのだ
涙で重たい君達よ
君達に向けられた鋭い静けさの中で
凹んだ文字を
手で読み取っておくれ
君達の手が握りしめられたとき
この墓石の深い刻跡の中から
石工の血が君達へ流れ込むのだ

着ぶくれした闘いの中で
どこにでもある
静けさを運ぶ夕日を希った
君たち
廃墟の中に
今あるのは
巨大な学生会館の虚像

夜は身を焦す焚火に守られ
ぼくたちは
苛酷な闘いを組んできた
許せぬ気まぐれ霸王を相手に
不安に凍えた手を
ポケットにつっこんで
ぼくたちはどこへ
君たちをとりのこしてきたのか
怖ろしいほどの速さで
キャンパスは白けた まるで
相似形の市街地のように
暴虐の裂け目に
ひっそり棲息を強いられる
ぼくたち
忘却の許されぬ
この廃墟の
ひび割れた鏡にのまれた
君たち

秋のすきまで

僕等は

葬式の朝が

曲った睡気を誘うように

葬式の夕暮れに

黒ヴェールの君等に

声をかけるわけにはいかない

赤ずきんの

マツチ売りの少女が商売を始めても

僕等は

三角巾を振る

血が流れずに

リンパ液が滲む

そんな闘いを続けて

満月を抱く

新月の空の下で

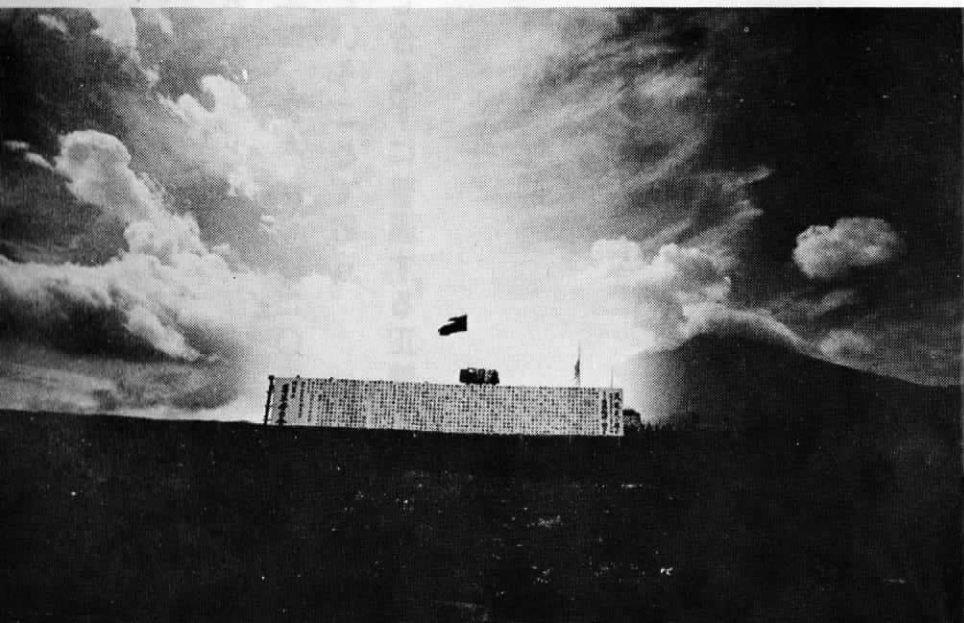
僕等は

冬用オーバーを探す

(一九六六年)

第四章

静寂は きなくさく



(筆者は当時早大文化
団体連合会常任委員)